

“鎌倉楽しむ会”

## 箱根早雲寺・小田原城の散歩

- ◆ 集合場所：小田急箱根湯本駅改札口
- ◆ 開催日：2024年3月16日（土）
- ◆ 集合時間：10時20分
- ◆ 解散時間：15時00分頃予定／JR 東海道線 小田原駅
- ◆ 参加費：500円（交通費・飲食代・拝顔入場料などは自己負担）
- ◆ 散歩コース

（集合）小田急線・箱根湯本駅・改札口

- 1、後北条家菩提寺 早雲寺
- 2、箱根風祭駅 かまぼこ博物館
- 3、箱根板橋駅 箱根見附跡
- 4、大久寺（大久保家の墓所）
- 5、清閑亭（旧黒田長成別邸）
- 6、小田原城 天守閣
- 7、小田原城 常盤木門
- 8、小田原城 銅門
- 9、小田原城 馬出門
- 10、片岡永左衛門本陣跡（明治天皇本町行在所址）
- 11、小田原なりわい交流館
- 12、清水金左衛門本陣跡（明治天皇小田原行在所址）
- 13、山王原一里塚跡（日本橋から20番目・約80Kの一里塚）
- 14、江戸口見附跡

（解散）JR 東海道線・小田原駅

### 1、後北条家菩提寺・早雲寺（箱根湯本）



・小田原城主・北条氏の菩提寺、2代氏綱（うじつな）が初代早雲の遺命によって、大永元年（1521）に建立した臨済宗大徳寺派の名刹。北条氏の庇護の下、大寺院へと発展するが、天正18年（1590）の豊臣秀吉の小田原攻めですべて焼失し、寛永4年（1627）に再興された。境内にある茅葺き屋根を頂く鐘楼に下がる梵鐘は、秀吉が小田原攻めするとき、石垣山一夜城の陣鐘に使用したという。

後北条5代の墓のほか、一般公開されていないが国の重要文化財の「北条早雲画像、氏綱、氏康（うじやす）の画像、早雲の三男・幻庵（げんあん）作の庭園などがある。

- ・庭園は本堂の裏からその一部を垣間見られる。
- ・秀吉の小田原攻め時には早雲寺に本陣が置かれたという。

## 2 箱根風祭駅 鈴廣かまぼこ博物館



・かまぼこ博物館の経営は鈴廣蒲鉾株式会社が運営しています。1F は工場と体験教室、2F はかまぼこ板美術館、3F は食と科学をテーマにしたミュージアムとなっています。

・鈴廣の歴史は古く、江戸時代は天明年間（1781-88）初代村田屋権右衛門が小田原宮の前（現：小田原市本町）で、網元として魚商を営み商標を「やまきゅうぼし」とした。



・内容は「やま＝箱根」「きゅう＝久」「ほし＝星」で「箱根山に幾久しく輝く星」を意味しているという。

・慶応元年（1865）四代目村田屋権右衛門が漁業の副業として代官町（現；小田原市本町1丁目）で、かまぼこの製造を始める。・明治4年（1871）村田屋権右衛門が戸籍法により「鈴木」の姓となる。

・明治20年（1887）六代目鈴木廣吉が、店を千度小路（現；小田原市本町）に移し“屋号を「鈴廣」と改める。現在は10代目の鈴木博晶社長で、年商100億円の企業に成長させ、さらに、かまぼこ製造技術者を養成し、国家資格の「水産練り製品製造技能1級」の社員が16人、「都道府県資格の2級」保持者が20人余と教育に力を入れ業容の発展に努めています。



**閑話休題：**蒲鉾の歴史は古く、神話時代に神功皇后が三韓征伐の際（3世紀ころ）、すりつぶした魚の身を鉾につけ、焼いて食したのがはじまりだと伝えられています。（小田原籠清のHPより）

・「かまぼこ」が日本の歴史に初めて登場するのは平安時代の永久3年（1115）関白の藤原忠実の転居祝いが開かれ、その祝膳の献立図が、文献「類聚雑要抄」（るいじょうようしゅう）に描かれており、その中に、串に刺した「かまぼこ」が記録されているという。（仙台阿部蒲鉾店 HP より）



・**名称の起源：**かまぼこという名は、室町時代の古文書「宗五大草紙」（1528）に、「かまぼこはナマズ本也、蒲の穂に似せるもの也」とあり、原料がナマズで、形相がよくないので、すりつぶし、これを竹に巻き付け「蒲の穂」に似せてつくりました。「蒲の穂」は「鉾」に似ているので、現在の「ちくわ」を「蒲鉾」と呼んでいたようです。

ちなみに、ガマ（蒲）の穂に似ているので「かまぼこ/蒲穂子」と呼び、後に訛って「蒲鉾」となったようです。

・**板蒲鉾の起源：**「摂戦実録大全・巻一」に秀頼公が大阪へ御帰城の時、伏見で梅春という都の料理人が、かまぼこを造って振舞ったという話の中で「板に付けてふるまった」という文があります。このことから、板蒲鉾の発祥は室町時代中期ということになります。（株式会社堀川 HP より）

### 3. 板橋見附跡

- ・小田原北条時代には、総構の西の防御部分に当たります。秀吉の攻撃を受け落城してから、徳川家康に破却され、あらためて、東海道の西の出入り口になり、上方見附とも言われた。現在は名前が残されているだけで、当時の跡は残されていない。
- ・寛文 12 年（1672）の村明細帳には 101 軒の家屋、茶屋 11 軒、石屋 17，紺屋 1 が記録されている。石屋が多かったのが城周りの整備集団が住んでいたようです。
- ・江戸時代のなごりの醤油醸造業を営んでいた「内野家」が、この界隈のシンボルとなっている。

### 4. 大久寺（大久保家の墓所）



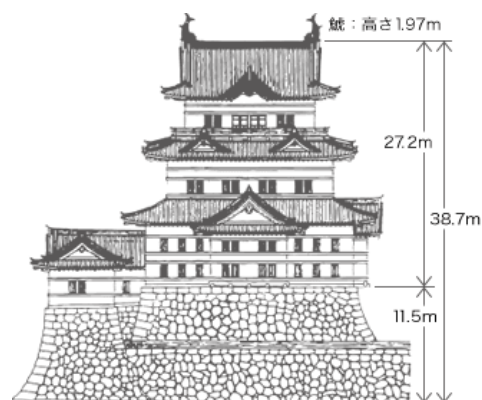
- ・大久寺は、豊臣秀吉の天正 18 年（1590）の小田原征伐に徳川家康に従って参戦した遠州二俣城主・大久保忠世が、合戦後論功行賞によって小田原城 4 万 5 千石を賜った後に創建「天正 19 年（1591）」した日蓮宗の寺である。
- ・開山は、忠世が帰依し、二俣から招請した日英上人。以後、大久保家の菩提寺とした。
- ・しかし、慶長 19 年（1614）、2 代忠隣（ただちか）が改易となり、寺が衰退した。
- ・寛永 19 年（1633）には忠隣の二男・石川忠聰（ただふさ）が江戸下谷に移転し、教風山大久寺とした。
- ・小田原藩主は阿部政次、稲葉正勝と続くが、忠隣公の子孫・大久保忠増が貞享 3 年（1686）70 年ぶりに、佐倉から 10 万 3 千石で入府して小田原藩主を務めていく。
- ・大久保康任（やすとう）が、石塔・位牌を当地に戻し、大久寺が再建された。2 代忠隣など 7 基の墓石が並んでいる。

### 5. 清閑亭（旧・黒田<sup>ながしげ</sup>長成別邸）



- ・明治時代に活躍した黒田長成侯爵の別邸として、明治 39 年（1969）に建てられた。
- ・黒田長成は、筑前福岡藩主・黒田長知（ながとも）の長男として、慶応 3 年（1867）生まれ、明治 11 年（1878）に家督を継ぎ、17 年侯爵となった。
- ・18 年（1885）にケンブリッジ大学に留学し、学士号を取得して卒業する。その後、宮内省の式部官、貴族院議員、枢密顧問官を務めるなど、明治時代に活躍した人物です。
- ・現在は小田原市の施設として、平成 22 年（2010）より一般公開されている。（入場料無料）

## 6, 小田原城 天守閣



- 天守閣は、昭和35年に市制20周年記念事業として総工費8千万円をかけて復興された小田原市のシンボルです。
- 江戸時代に造られた雛型や引き図（宝永年間の再建の際に作られた模型や設計図）を基に、江戸時代の姿として外観復元され、内部は歴史資料の展示施設となっています。
- 3重4階の天守櫓に付櫓、渡櫓を付した複合式天守閣で、地上 38.7m、鉄筋コンクリート造、延べ床面積 1822 m<sup>2</sup>となっています。なお、最上階高欄付き廻縁は復興に際し新たに付けられたものです。
- 内部には甲冑・刀剣・絵図・古文書など、小田原の歴史を伝える資料や、武家文化に関わる資料などが展示されています。標高約 60mの最上階からは相模湾が一望でき、晴れた日には房総半島まで見ることができます。
- 小田原市では平成18年に天守閣の高さを基準とした高度制限を行い、天守閣の高さを超える建物の建築を制限し、長い時間をかけて育まれた歴史景観を次代に受け継いでいくことにしています。

## 7, 小田原城 ときわきもん 常盤木門



- 常磐木門は江戸時代初期から設けられ、重要な防御拠点であったために、他の門と比べても大きく、堅固に造られていた。しかし、元禄16年（1703）の大地震で崩壊した後、宝永3年（1705）に、多門櫓と渡櫓門から構成される櫓形門形式で再建された。その後は小田原城廃城（明治3年・1870）まで姿をとどめていたといわれる。現在の常磐木門は、市制30周年事業として昭和46年（1971）再建されました。

## 8, 小田原城 銅門



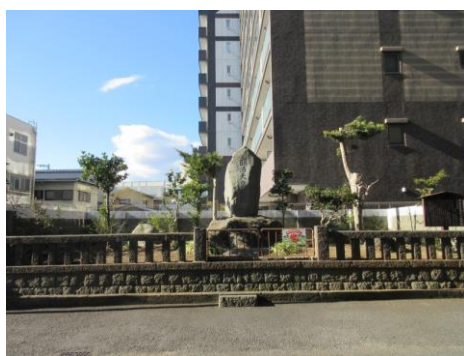
- 馬屋曲輪から二の丸に通じる位置にある。大扉などに銅板の装飾が施されており、そこから名前が付けられた。昭和58年（1983）から行われた発掘調査の成果や、古写真、絵図などを参考にして、平成9年（1997）に復元されました。

## 9、小田原城 馬出門



- ・この門は、江戸時代初期から末期まで存在し、現在の門は、平成21年（2009）に再建されたものです。二の丸の正面に位置する門として重要な役割を果たしてきた。
- ・馬出門は寛文12年（1672）に馬出門と内冠木門の二つの門と周囲を土堀で囲まれた「柵形」と言われる門の構造をもつ現在の姿に造り変えられた。
- ・門の手前には馬出門土橋（通称めがね橋）が架けられている。

## 10、片岡永左衛門本陣跡（明治天皇本町行在所址）



- ・愛媛の松平（15万石の大名）をはじめとして、岡山、岐阜、三重などの諸大名が宿泊した。また、ここは明治天皇が宿泊した場所でもある。
- ・天皇は明治11年（1878）、北陸・東海御巡幸の際の11月7日のことであった。
- ・この事蹟を記念し、本陣跡に石碑が建てられている。

## 11、小田原宿なりわい交流館



- ・元は、江戸時代の旅籠で、大正時代にはブリ漁などに使われる漁網の間屋であった。関東大震災による被害を受けたが、昭和7年（1931）に再建され、その後に整備されて、市民や観光客向けの「憩いの場」として、平成13年（2001）9月に開館しました。
- ・建物には小田原の典型的な商家の造りである「出桁（だしげた）造り」が用いられています・  
(年中無休/入館無料)

## 12、清水金左衛門本陣跡/明治憲法小田原行在所址



- ・清水金左衛門本陣は、小田原で4軒あった本陣の筆頭で、明治天皇が、明治元年（1868）10月8日の御東行をはじめとして宿泊は5回を数える場所でもあり、この事蹟を記念し「明治天皇小田原行在所址」の碑が立っている。
- ・清水本陣は屋敷面積400坪（建坪242坪）もあり、尾張の徳川家・薩摩の島津家・肥後の細川家・安芸の浅野家・近江の井伊家・備前の池田家・伊勢の藤堂家・土佐の山内家などの諸大名が宿泊した。

### 13. 山王原一里塚跡 （日本橋から20番目・約80Kの一里塚）



#### ・「一里塚址」の説明板より

小田原北条氏は天正18年（1590）の豊臣秀吉の小田原攻めに対し、総構といわれる周囲約9kmの堀や土塁を構築し、城のみならず城下町までを取り込んだ戦国期最大級の城郭を築きました。

この付近は、その総構の最も南に当たり、小田原合戦のときには、徳川家康が山王川の対岸に陣取っていました。

江戸時代には、小田原城下に入る東の出入り口として、西の板橋宿及び甲州道の井細田口とあわせて、城下を警護する重要な門としての役割を担っていました。

#### ・「江戸口見附並びに一里塚」の説明板

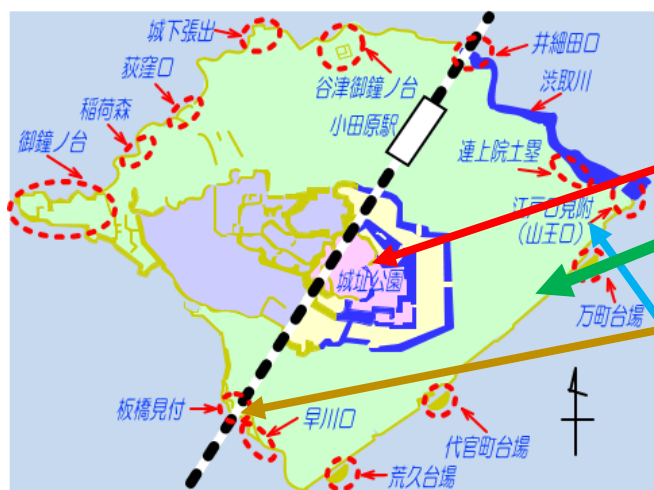
見附とは、城の枡形門に設けられた見張り番所であって、武器を用意し、昼夜番士が詰めて警戒に当たる場所であるが、天正18年の豊臣秀吉の小田原合戦の際には、町ぐるみ堀や土塁で囲まれていたが、江戸初期にこの構造を壊して東海道を通す際に、枡形が造られた。小田原城から江戸に向かう出口であったため、江戸口見附と名づけられた。

また、ここは江戸から20番目の一里塚があった場所でもある。

・慶長9年（1604）江戸幕府将軍徳川家康は息子秀忠に命じて、東海道、東山道、北陸道に、江戸日本橋を起点として一里（36町・約4キロ）ごとに塚を造らせた。塚は男塚、女塚と、街道の左右に対で置かれ、広さは通常5間（約9メートル）四方であった。

・塚には榎を植え、旅人の1里ごとの目印とするともに、夏季における木陰の休憩場所とした。

参考



#### \*小田原城の総構\*

- ① 小田原城
- ② 周囲 9 km
- ③ 板橋見附
- ④ 江戸口見附

## 「参考」：4 の大久寺に関連事項

### 大久保忠隣公について、



- ・徳川家康（1543-1616）の幕閣には、酒井忠次（1527-1596）、榊原康政（1548-1606）、本多忠勝（1548-1610）、井伊直政（1561-1602）の四天王と称せられる武将がおりますが、それ等に劣らず活躍を見せた武将に「大久保忠世」がおります。
- ・徳川家康の三河の国を治める最初の難関は、領内に於ける「一向一揆」の反乱でした。この時、反乱の首謀の 1 人に「本多正信」（1538-1616）がおり、この正信の知略により徳川家は苦しめられましたが、徳

川家忠臣の粘り強い戦いで、苦難の末、ようやく平定しました。

・ようやく棟梁としての徳川家康は、忠臣たちの具申を取り入れ、人材の登用・確保、領国の拡大を目指し三河国を治め、守護大名にのし上がっていくのです。そのとき、大久保忠世は、過って一向一揆にて敵方に別れ、諸国を流浪していた盟友の「本多正信」を説得し、徳川家康の幕閣に復帰させることに成功しました。

・この正信の知略の加入により、ここから始まる乱世を徳川家康は勝ち抜き天下を狙うことを目標にし「厭離穢土欣求浄土・（おんりえどごんぐじょうど）」を掲げ、武田信玄、織田信長、というライバルが次々と倒れる中、優秀な忠臣に支えられ、豊臣秀吉が「小田原北条」を滅ぼす（1590）ことにより、江戸城が拠点となった。その時、西国からの侵攻を防ぐ目的の重要拠点として小田原城が充てられた。この城主に家康の最も信頼の厚い「大久保忠世」が初代となって箱根に強固な関所を設け管理体制を任されていくのです。

・慶長3年（1598）秀吉も死に至った故、これから始まった関ヶ原の戦いを制し、征夷大將軍となり、それをすぐさま徳川秀忠に譲り、そして淀殿の大阪城を攻め、豊臣家を滅亡させ、ついに天下人となったのです。

・その後、家康は駿府城に移り「大御所」となり、2代將軍秀忠に形は政務を執らせることとします。秀忠將軍の側用人に、知略者「本多正信」と大久保忠世の嫡男・小田原二代城主の武闘派「大久保忠隣」が指名され活躍し老中まで勤めます。忠隣は武闘派なるが故に、「秀忠」が関ヶ原攻めの途中、真田昌幸の上田城攻略を主張し、失敗したことが家康の心証を害しました。

・さらに、大名間の婚姻が許可制になっているのを破ってしまう。秀忠幕府は古参大名の改易を虎視眈々と狙っていることに気づかないようでした。これらの行動は逐一本多正信がつかみ、息子の本多正純（家康の側用人）から家康に報告されていた。そこに起きたのが「大久保長安事件」なのです。



・大久保長安は、武田信玄の家臣でしてが、武田が滅んだ時、家康が作事の才能を見抜き、大久保忠隣の与力に任じられました。その才能は見事で、八王子に居館を構え、八王子千人同心をつくり、甲州を徳川家の天領にし、また、石見銀山・佐渡金山の飛躍的採掘に成功し徳川幕府の金庫を潤しました。しかし、その行動は派手過ぎて、幕府の警戒を呼び込んだようです。没後（慶長13年・1613）蓄財していた

財産は没収、子息7名打ち首、親族はことごとく追放されてしまう。この事件も関係してか大久保忠隣の小田原藩主は改易されてしまう。しかし、孫の「大久保忠朝」は佐倉藩の藩主から70数年ぶりに小田原城主に10万3千石で復帰し明治期まで続くのです

## 小田原城城主 北条早雲の誕生



- ・室町時代の小田原は、鎌倉公方の治める土地であった。公方4代目の足利持氏は、本家・京都の将軍家就任を強く望むようになった。それを関東管領上杉氏憲が諫めたことなどを理由に鎌倉府の中で、内紛の様相が絶えなくなり、ついに氏憲（のち禅秀）の反乱が起き、公方持氏は駿河の今川範政を頼り逃げ込む。ここに将軍・足利義持の出現もあり、上杉禅秀は敗れ自害、持氏は鎌倉へ復帰。
- ・このような混乱の時、応永24年（1417）鎌倉公方足利持氏は小田原周辺の領地管理を駿河国「大森頼春」に与える。嫡男の大森実頼は、享徳3年（1454）武蔵の国の

争乱が激しくなってきたので、小田原の八幡山に小田原城を築城し一帯を支配していった。

- ・京の都では足利義政が就任。政は細川家、斯波家、山名家に預け、文化芸術に力を注ぎ、また、妻の日野富子の才覚も発揮され、将軍の統率力は低下し、管領家の内紛も複雑に絡み、管領の細川家と山名家が東西に陣を敷き11年にも及ぶ「応仁の乱」内乱が発生していくのです。
- ・この時「北条早雲」は「伊勢新九郎宗瑞」として、駿河国は今川家の申次衆という執事の地位にあったようです。そして、建仁寺や大徳寺で禅を学んでいたことも分かってきました。
- ・伊勢新九郎宗瑞の出自は、近年の学者先生の研究で、備中荏原荘（現：岡山県井原市）であるということが分かってきました。また、父の「盛定」は幕府政所執事・伊勢貞親の妹婿で8代将軍・足利義政の申次衆として重要な位置にいたことも明らかになってきました。
- ・京の応仁の乱は、駿河国今川義忠も上洛し、東軍の細川家に加わった。
- ・また、父・盛定の妻の親・伊勢貞親は今川義忠と関係が深かったので、父・盛定の娘（宗瑞の兄弟）が、今川義忠に「北川殿」として嫁いでいました。

・文明8年（1476）、今川義忠は西軍に属していた遠江の守護・斯波義兼の襲撃で憤死する。残された嫡男・龍王丸は幼少のため、家督争いが始まる。これに扇谷上杉家、堀越公方足利政知が介入し、それぞれの家宰の太田道灌と執事の上杉政憲が兵を率いて駿河国に出兵してきた。

・この状況を奥方の「北川殿」は、京にいた弟・伊勢新九郎宗瑞を頼り、宗瑞は駿河へ下って調停を行い、亡き義忠の弟・範満に、龍王丸が成人するまで家督代行することにした。太田道灌と上杉政憲を撤兵させた。ところが、龍王丸が15才過ぎても範満は家督を戻さなかった。

・このため「北川殿」は再び宗瑞を頼り、それに呼応して長享元年（1487）11月、宗瑞は兵を起こし、館を急襲し範満を殺害し、龍王丸は「氏親」を名乗り今川家当主となった。

・そして、伊豆国田中な所領を与えられ「興国寺城」（沼津市）に入りました。次に堀越公方の政知が亡くなり家督騒動が発生、それに介入し、「伊豆国韮山城」（現：伊豆の国市）を新たな居城として伊豆国の統治を始める。

- ・明応4年（1495）、相模小田原の大森藤頼を討ち小田原城を奪取する。
- ・ここから、早雲（宗瑞）・氏綱・氏康・氏政・氏直の100年の歴史が続くのです。

完